

船井情報科学振興財団 第1回報告書

留学決定に至るまでの経緯

安室 美陽

2024年6月

1. はじめに

初めまして、2024年度 Funai Overseas Scholarship (FOS2024) 奨学生の安室美陽(やすむろ みはる)と申します。2024年3月に北海道大学農学部応用生命科学科を卒業し、今夏から Georgia Institute of Technology, School of Biological Sciences の Biology Ph.D.課程に進学する予定です。本報告書では、私がアメリカ大学院を思い立ってから進学先決定に至るまでの経緯を述べています。私は優秀なわけでもなければ特別なスキルがあるわけでもなく、海外大学院に興味を抱いた時点では海外経験もありませんでした¹。そのため、過去の奨学生の方々の報告書を読んでいたときは、際立って優秀な人や海外経験豊富な人など、特別な人だけが海外大学院へ進学すると思っていた。しかし、自分なりに少しずつ行動を起こしていく中で人や運に恵まれ、結果的にアメリカ大学院に進学することになりました。私の例はあまり参考にならないかもしれませんが、本報告書が少しでも皆さんのお役に立てば幸いです。

2. 出願準備

出願するにあたり、情報収集をしっかりと行い計画的に準備を進めることが重要だと思います。私もこのことは重々承知していたはずなのですが、自身の計画性のなさや先延ばし癖が災いし、結局おざなりになってしまった部分が多々あります。そのため、出願予定の方は私の経験を反面教師にいただければと思います。なお、私が出願したプログラムでは GRE (Graduate Record Examination) が必須ではなかったため、受験しませんでした。

2-1. 推薦状

推薦状の執筆は 1. 学部時代の指導教員(北海道大学教授)、2. 学部時代の所属研究室の名誉教授、3. 研究インターン先の PI(Georgia Tech 教授)にお願いしました。大学院への出願時だけではなく、奨学金への応募にも1通(船井財団のみ3通)の推薦状が必要であったため、こちらは1の先生に執筆していただきました。1,2の先生方には、学部3年の頃から海外大学院に出願する可能性があることを伝えており、前もって執筆をお願いしていました。3の先生には、研究インターン終盤の9月下旬に執筆をお願い

¹ おまけに英語は大の苦手です。

いました²。お三方ともお忙しい中、推薦状の執筆を快く引き受けてくださり、非常にありがたかったです。

被推薦者が推薦状の下書きをすることもありますが、私は内容に関する要望は尋ねられたものの、基本的に推薦者の方々が自ら執筆してくださりました。ただ、アメリカ大学院においては有効な推薦状の書き方があるそうなので、推薦者がアメリカ大学院向けの推薦状を執筆したことがない場合、FOS 選考委員の加藤さんが書かれた米国大学院生学生会のニュースレターの記事などを参考にすることをおすすめします。私の場合、1, 2 の先生方からの推薦状については、加藤さんからアドバイスをいただきました。

2-2. SoP (Statement of Purpose)

夏頃から奨学金の準備と並行して草稿を書き始め、様々な人に添削してもらいながら出願直前まで推敲を重ねていくのが理想的だと思います。しかし、私は研究インターンを言い訳に SoP を完全に後回しにしており、10 月になっても内容や構成をほとんど考えていませんでした。まともに考え始めたのは 11 月に入ってからと非常に遅く、自業自得ですが出願締め切り直前に苦しむことになりました³。XPLANE の SoP 執筆支援プログラムの存在も認知していたのですが、後回しにしているうちに応募申し込みの期限を過ぎていました。さらに、大学によっては SoP の代わりに(または SoP に加えて)、Research Statement や Personal Statement, Diversity Statement, Writing Sample などといった書類が必要だったのですが、これに気がついたのは出願直前だったため、こちらも慌てて準備する羽目になりました。このように SoP の準備に関しては反省点だらけですが、加藤さんや FOS2022 の藤田さん、FOS2023 の大島さん、FOS2018 の大岸さんを始めとする先輩方やそのご友人の方々にお力添えしていただいたおかげで、なんとか提出できるものに仕上がりました。お忙しい中、締め切り寸前まで添削して下さった方々には本当に頭が上がりません。

2-3. CV (Curriculum Vitae)

学歴や職歴、研究経験、業績などを記載した履歴書のことを指します。CV には指定のフォーマットがないため、インターネット上の CV を参考にして見よう見まねで作成した後、研究インターンで知り合ったアメリカの大学院生の方々に添削していただきました。公開されているような CV はどれも華やかな経歴や業績が載っているため、特筆すべき経歴が少ない場合(特に研究経験が少ない学部生など)は自分と比較して落ち込むかもしれませんが、自分の経歴がより良く見えるように工夫すれば大丈夫だと思います(もち

² 本当はもっと早くにお願いしたかったのですが、インターンの成果が出ていない時点でお願ひするのは気が引けたため、インターン中は良い結果を出すことに集中していました。また、このとき船井財団の奨学金応募の締め切り直前でしたが、ダメ元でこちらの推薦状についても尋ねてみたところ、なんとご快諾していただきました。本当に感謝しています。

³ SoP に取り組むのが遅かっただけでなく、この時期に出願校を考え直したことも苦しくなった要因です。船井財団に採用していただいた後、FOS の先輩のご紹介で多くの方々に出願校についてのアドバイスをいただいたのですが、話を聞く中で出願校を見直すべきだと思い始めました。このとき、夏頃から色々な人に積極的にコンタクトをとって話を伺ってれば…と後悔しました。時間がないことへの焦りから精神的な余裕もなくなり、この時期はまともに眠れませんでした。睡眠不足が体調不良を招くという悪循環に陥ってしまったので、皆さんは時間に余裕を持って準備を進め、たくさん寝るようにしてください。

ろん嘘はダメです)。斯く言う私も、所属研究室の方針やタイミングの悪さにより、学部時代に学会発表を行う機会が得られませんでした。なけなしの自分の強みを最大限に強調して書きました。

2-4. 成績 (GPA)

アメリカ大学院の選考過程において、成績は足切りに用いられるだけで合否自体にはあまり影響しない印象があります。よって、悪目立ちするほどでなければ気にしすぎる必要はないと思います。ただ、奨学金の選考過程では成績も考慮されるため、副次的な効果を考えるとやはり成績が良いに越したことはないと思います⁴。私は成績改善にまでは至らずとも、維持することだけは意識していました。

出身大学の GPA が 4.0 スケールではない場合、アメリカの基準に合わせて 4.0 スケールに換算しなければならないこともあるようですが、私はアメリカ大学院への出願時に 4.3 スケールの GPA をそのまま提出することができました(出願時:4.12/4.3)。換算の要不要は大学やプログラムによって異なるため、出願予定のプログラムの要項を事前に調べておくことをおすすめします。

2-5. 英語テスト

昔から英語に対して人一倍苦手意識を持っている私にとって、英語は非常に大きな壁です。それまで英検や TOEIC などの英語テストから逃げ続けていましたが、そうも言っていられなくなり TOEFL iBT を受験しました。受験した時期と結果は以下の通りです。

1 回目(学部 3 年 12 月) 87

2 回目(学部 4 年 4 月) 97 (MyBest スコア⁵ 100)

2 回目も満足のいく結果ではありませんでしたが、これ以上 TOEFL を受験したくない気持ち⁶と受験予定であった大学の最低基準を満たしていたことから、このスコアを出願に用いることにしました。

海外大学院進学を考えている方々は元から英語が得意・好きな人が多いかもしれませんが、上述したように、私は英語にかなりの苦手意識がありました。そこで、少しでも英語を楽しめる方法(Podcasts や YouTube, Prime Video など)を探し、英語に触れる機会を増やしていきました⁷。つまらないテスト勉強からはどうしても逃れられませんが、これにより少なくとも英語アレルギーから脱却することができました。

⁴ 私の場合、在籍大学から成績優秀者に送られる賞を頂くことができたため、CV や奨学金への応募書類における受賞歴の見栄えを良くすることにも役立ちました。

⁵ 過去に受験したテストにおける各セクション(リーディング・リスニング・スピーキング・ライティング)の自己ベストの点数を合計したスコアのことです。一部の大学では MyBest スコアの使用が認められています。

⁶ テストそのものが嫌なだけでなく、受験料が高いことがネックでした。円安の影響により、受験料は 3 万円以上/回(!)になっていたため、割引クーポンなどを利用して少しでも費用を抑えていました。

⁷ 美容師さんにたまたま勧められた"The Big Bang Theory"というコメディドラマにハマっていました。特に Sheldon が好きです。

2-6. 奨学金

競争率の高い奨学金を得る自信がなかったため、応募可能な奨学金にはできる限り応募しました(表1)。奨学金への応募には、志望動機書や留学先での研究(学習)計画書、推薦状、成績、英語テストのスコア等が必要です。これらに加え、研究論文の要旨や資金計画などが求められることもあり、複数の奨学金への応募はかなりの労力を要しました。特に、私は留学先で研究分野を少し変更しようとしていたため、研究計画の書き方に悩まされました。学振申請書のような高度な計画を立てることは不可能だと考え、興味のある分野の総説や論文などを読み、専門性や具体性には欠けるものの、異分野の人にも分かりやすい文章を書くことを心がけました。結果的にかなり粗の目立つ研究計画となりましたが、それでもほとんどの奨学金の書類審査を通過したことを鑑みると、計画自体よりも進学先でやりたいことを明確に伝えることの方が大切なのかもしれません。

また、応募方法が書類郵送であるところが多かったのですが、応募時期に私はアメリカにいたため自分で郵送できないという問題がありました。そこで、手書きのところは渡米前に仕上げ、残りはアメリカ滞在中に作成して、印刷と郵送は日本にいる家族や在籍大学の教務の方をお願いしました⁸。帰国後の10月頃から書類審査の結果通知が届き始め、10月下旬から順次面接を受けました。11月に入ってすぐ、第一希望であった船井財団から採択通知を頂けたため、この時点で他の奨学金の選考は辞退しました。

表 1. 応募した奨学金一覧

奨学金	書類審査	面接
船井情報科学振興財団	合格	合格
中島記念国際交流財団	不合格 ⁹	-
平和中島財団	合格	辞退
吉田育英会	合格	合格
伊藤国際教育交流財団	合格	辞退
日本学生支援機構 (JASSO)	合格	辞退

3. 出願後の動向

3-1. 面接

海外大学院の説明会や体験談では出願準備に焦点が当てられていることが多く、私も出願が最大の山場だと思っている節があったのですが、面接も重要であることを思い知らされました。ある大学の先生の話では、面接に呼んだ候補者は全員合格するポテンシャルを十分に持っていますが、面接を通して大学お

⁸ 自身の先延ばし癖に加え、複数の奨学金への応募準備をインターン中に行ったため、かなりお粗末な書類をそのまま提出してしまいましたが、提出前に一度は誰かに目を通してもらうべきだったと思います。

⁹ FOS2024 川手さんの報告書を読んでいて気がついたのですが、私は応募時期にちょうどインターンでアメリカにいたため、そもそも応募資格がなかった可能性があります。(応募書類の出来栄から言って、出願資格があったとしても結果は変わらなかったことでしょう。)

よびプログラムと本当にフィットしているかを判断しているそうです。私は、出願準備だけでなく面接においても後悔していることがあるため、後進の方々が同じ轍を踏まないことを願って、私の体験談を載せておきます。

私は12月中旬から2月にかけて、4つのプログラムの面接を受けました(表2)。海外からの出願ということもあり、面接はオンラインで行われることが多いと思うのですが、私が出願したプログラムでは最終面接が現地で行われた大学もありました。私はいずれもオンライン面接だと思い込んでいた上、その大学のウェブサイトに現地実施と明記されていなかったため、面接への招待メールを読んだときは何かの間違いかと思いました¹⁰。私の場合は幸いにも、渡航費・宿泊費・食費等の経費は全て大学側が負担してくださったため、自腹を切ることはありませんでしたが、大学やプログラムによっては、出願者の住所に関係なく同額一律支給ということもあるそうです¹¹。また、現地面接に参加する場合には他の面接との兼ね合いにも気をつけてください。

いずれの大学においても、面接では研究経験や志望理由、興味のある研究などを尋ねられ、最後に必ず逆に質問する機会が与えられました。面接官の人数は1人または2人で、教員だけではなく大学院生が参加していたこともありました。面接はいずれもリラックスした雰囲気で行われ、面接というより雑談のようだったため、過度にかしこまる必要はありませんでした。しかし、これが私にとってはかえって仇となりました。というのも、英語に自信がない私は、想定通りの質問に対しては用意していた答えで返せましたが、それに対する質問やカジュアルな会話では緊張もあり上手く話すことができなかったからです¹²。英語テストは基準さえ満たせば大丈夫ですが、面接に備えて会話の練習をすべきだったと反省しています。

表 2. 面接校一覧

大学	プログラム	日程	面接形式・時間
California Institute of Technology	Biology	12/13 1/24-26	オンライン, 15分 オンキャンパス, 30-70分×3
Stanford University	Biochemistry	1/8 ¹³	オンライン, 10分
Georgia Institute of Technology	Biology	1/18	オンライン, 15-30分×2
University of California, Davis	BMCD	1/30	オンライン, 30分

¹⁰ 確かにウェブサイトにはオンラインとも書かれていませんでした....

¹¹ 同じ大学でも出願プログラムによって異なることがあるため、注意が必要です。また、複数の大学の現地面接に参加する場合、出願者の旅費を大学間で分割して負担することがあるようです。

¹² あちらにしてみれば、喋らずにただニコニコしているだけのやばい人だったかもしれません。特に現地での面接は悲惨で、面接だけでなく教授陣との食事会が何度かあったのですが、先生や他の候補者たちの話になかなかついていけず、半ば諦めていました。

¹³ これはおそらく公式の面接前のスクリーニングだったのですが、残念ながらここで落とされてしまいました。これには Assistant professor に加えて1人の大学院生も参加しており、非常にカジュアルな雰囲気でした。研究の話や志望動機を詳しく聞かれなかったため、今思うとここで英語力を確認されていたのかもしれない(この大学の英語要件は満たしていたものの、基準点ちょうどでした)。

3-2. 進学先の決定

インターンでお世話になった教授が歓迎してくださったため Georgia Tech へ進学することになりましたが、実は出願時にプログラムの英語要件を満たしていませんでした。これは、出願を決めたタイミングがインターン終了後の10月頃と遅く、出願前に TOEFL を再受験することができなかったためです。しかし、先ほどの教授に点数が足りていなくても出願できると言われたため、出願することにしました。ウェブサイト上では点数不足により出願フォームを提出することができず、本当に大丈夫なのか不安に思っていたのですが、無事に面接に呼ばれました。3月頃、英語要件を期日までに満たせば正式なオファーを出すという知らせを受けたのですが、諸事情により期日までに英語テストを受験することができませんでした。それにもかかわらず、合格を保留にして待っていてくださり、5月に TOEFL を再受験して6月頭ようやく正式なおファーレターを受け取ることができました¹⁴。このように大学の方々が柔軟な対応をとってくださっただけでなく、この間のやり取りも非常に親切だったことから、改めて Georgia Tech への進学が決定して良かったと感じています。進学先を選ぶ際には、研究内容だけでなく PI の人柄や大学の雰囲気も重視していたため、インターンを介して事前に知ることができた点も安心材料になりました。

4. 海外大学院進学に至るまで

4-1. 興味を抱いたきっかけ

明確な理由があったわけではありませんが、私は中学生の頃から漠然と生物系の研究者になりたいと思っていました。未知の現象を明らかにすることが魅力的に思えたからかもしれません。このときは特定の分野に興味があったわけではないのですが、「細胞」や「遺伝子」といった言葉に妙に惹かれたのを覚えています。高校・大学で生物学を学んでいく中で、生命を維持する仕組みがミクロのレベルで見事に（尊敬する先生のお言葉をお借りすると、まるでピタゴラスイッチのように）制御されていることが特に面白く感じられ、生命科学を専攻することにしました。

研究者を目指す上で博士号は取得したいと考えていましたが、博士課程の経済的な不安やポストク問題などといった不穏な話を耳にしていたため、日本で博士号を取得することに少し不安を感じていました。そんなとき、海外大学院の博士課程学生は学費を払う必要がなく、さらに生活費を貰いながら研究することができるという情報を目にしたことで、海外大学院に興味を持ちました。これを機に本やインターネットで情報を集め始め、米国大学院への進学も良いかもしれないと思うようになりました。とは言え、当時の私からすると現実味を帯びた話ではなく、心のどこかで自分には縁のないことだろうと思っていました。

¹⁴ 3月の時点で、英語要件を出願プログラムの基準である TOEFL iBT 100 から大学院全体の基準である 90 におまけしてもらっていたのですが、セクションごとの基準も設けられており、出願時のスコア 97 ではスピーキングのスコアが足りなかったため、結局再受験することになりました。

4.2. 決断するまでの紆余曲折

先述したように研究者のキャリアパスに不安を感じていたものの、それ以前に私は研究経験が全くなく、研究が性に合うか分かっていませんでした。そこでまずは、興味のある研究に携わってみたいと思い、学部2年の夏頃に所属学科の研究室を訪問しました。私の所属学科では各研究室に配属される時期は学部3年の秋頃となっていました。先生方のご厚意により、早期に研究室に出入りさせてもらえることになりました。ここで実験を1から教わって研究経験を積む傍ら、米国大学院学生会が主催する説明会に参加したり、所属学科の先生方に大学院について相談したりしていました。海外大学院についてポジティブな意見を聞く一方で、本当に良い環境なのか、海外経験もないのにいきなり大学院でやっていけるのか、自分に合った研究室・指導教員を見つけられるのか、そもそもただの学部生が合格できるのだろうか、と様々な懸念がありました。しかし最終的には、純粹に面白そうだから思い切って挑戦してみよう、と意外にもあっさり決断しました。きっと諦めるだろう、という自分の予想を裏切ってみたかったのも事実です。

学部3年の頃、研究経験の不足や海外経験がないことを不安に思い、アメリカでの研究インターンなどの機会を探しましたが、コネクションが全くなかったことや費用の問題もあり、なかなか機会が得られませんでした¹⁵。今思えば、アメリカの大学に知り合いがいる先生やすでに学位留学されている方々に積極的にコンタクトをとっていただければ、良いアイデアや方法を伺うことができたかもしれません。しかし、その時の私は合格する自信がなかったことから、米国大学院を受験することをあまり公言していませんでした。その後も地道にインターンの機会を探し続けていたところ、国内の財団が助成している研究インターンプログラムの公募を見つけ、渡りに船だと思い応募しました。こうして、学部4年の夏に Georgia Tech で約2ヶ月間の研究インターンを行うことになりました。インターン前は、アメリカの研究室の雰囲気や生活環境がどうしても合わなかった場合、出願を止めることも考えていました¹⁶。しかし、現地でのインターンを経験して、研究環境や雰囲気が非常に良かったことやPIの先生が出願を勧めてくださったこともあり、改めて出願の意志が固まりました。

一方、海外大学院に進学するタイミングについては、学部卒業後と日本で修士号を取得した後のどちらが良いのか悩みました。様々な意見を参考にした結果、どちらかがより良いということはなく、両方ともメリット・デメリットがあるようでした。私は日本の大学院に行く場合にも研究テーマを変えるつもりだったため、ダメだった場合には日本で修士号を取得してから再チャレンジすることも視野に入れ、学部4年で出願することにしました¹⁷。

¹⁵ 実際にいくつかの研究室にメールを送り尋ねてみましたが、基本的に返信はなく、運良く返信が来た場合にもアメリカ以外の学生を受け入れるのは難しいと断られてしまいました。

¹⁶ 文化の違いに慣れるには、まだまだ時間がかかりそうです。特に食事。

¹⁷ 学部4年の夏にインターンに参加していたため、日本では後期試験を実施している大学院しか受験できず、国内で本命のところは受験することができませんでした。アメリカ大学院が全落ちの場合に備えて日本の大学院にも出願しましたが、結局やる気が湧かなかったため、試験を受けに行きませんでした。しかし、後ろ盾があると安心できると思うので、国内も受験しておくことをおすすめします。

4-3. 振り返り

自分の向こう見ずな性格もあり、計画的・戦略的というよりは場当たりに準備を進めたため、もっとこうしておけば良かったなどと思う点多々あります。特に、自信がないからと弱気にならずに、自信がないからこそ、早いうちから海外大学院に興味があることを周囲に伝え、より積極的に出願先にコンタクトを取るべきだったと思います。準備不足であることを自覚していたため、心の余裕もありませんでした。さらに、インターン関連の用事や奨学金の面接等で何度も東京と北海道を往復したり、夜中にオンライン面接を行ったり、面接のために急遽アメリカに行くことになったりと、私にとっては体力的に厳しい面もありました¹⁸。

このように、慌ただしく決して万全ではない準備過程を経ましたが、最終的には本当に多くの人にご協力していただいたおかげで、無事に進学が決定しました。海外大学院という選択肢を知った当初は、実際に行くことになるとは想像していなかったため、自分でも驚いています¹⁹。学位留学は優秀な人や海外経験のある人がするもので、自分には難しいかもしれないと思っていましたが、わずかな可能性にかけて行動を起こしてみて良かったと心から思います。

5. 最後に

海外大学院を検討し始めてから進学決定に至るまで、非常に多くの方々にお力添えいただきました。まず、研究指導から推薦状の執筆に至るまであらゆる面でサポートして下さった所属研究室の先生方、何もできなかった私に1から研究スキルを教えて下さった先輩方に心より感謝いたします。所属学科の先生方や薬学研究院の先生方には、度々進路や進学先の相談に乗っていただき、多くのご助言をいただきました。本当にありがとうございました。また、中谷医工計測技術振興財団の方々や Georgia Tech の皆様にはインターンで大変お世話になりました。特に PI の先生には、推薦状の執筆だけでなく選考過程においてもご支援していただきました。本当にありがとうございました。

そして、船井情報科学振興財団の皆様には、未熟な私を奨学生として採択していただき、出願準備から現在に至るまで多大なるお力添えをいただいていること、改めて深く感謝申し上げます。選考委員の方々や FOS の先輩方のご協力およびご助言なしには、出願まで辿り着きませんでした。その他にも、学位留学されている先輩方や大学の教務の方々など、ここには挙げ切れないほど多くの方々に助けていただきました。心からお礼申し上げます。

現時点では伸び代しかない私にとって、先の数年は苦勞の絶えない期間となると思います。そのため、新生活に少し不安を感じている部分もありますが、これからどのような経験ができるのか、楽しみな気持ち

¹⁸ 現地面接から帰ってきた日は、疲労と時差ボケによって 18 時間寝てしまい(朝 6 時に起きるつもりが夜の 6 時)、直後に予定されていたオンライン面接をあやうくすっぽかすところでした。

¹⁹ 家族や親戚もとても驚いているようです。身近な親族には理系出身の人や大学院に進学した人がいないため、大学院および修士・博士とは何なのか、何をしにアメリカに行くのか、といった疑問を投げかけられました。私が自由勝手にインターンや出願準備をしている様子を見守り、この選択を応援してくれていることが非常にありがたいです。海外大学院へ進学する上での最大のデメリットの一つは、家族や親戚に簡単に会えなくなるのだと思います。

の方が大きいです。事が思い通りに運ばないときも必要以上に落ち込むことなく、逆に、物事が順調に進んでいる時も調子に乗ることなく、一步一步着実に力をつけていきたいと思っています。船井財団の皆様や家族など、自分を支えてくださっている方々への感謝の気持ちを常に忘れず、研究に打ち込める貴重な期間を最大限に活かしたいと思っていますので、今後とも温かく見守っていただければ幸いです。